

## ◎ 厳冬続く地方のレジャーパーク

## マイナランド 尾去沢（1）

オープン20年を迎えたマイナパークの“老舗”  
歴史に忠実な観光坑道だが、集客向上のためアミューズ機能を付加  
周辺に残る遺構は、廃墟探検ブームの新名所

2005年12月29日

※書籍「レジャーパークの最新動向2002」（2002年8月発行）の記事を掲載しています

このレポートを作成中、たまたまネットで次のようなコンテンツを見つけた。「鹿角への思いと生かしたいこと」と題した、マイナランド尾去沢のある秋田県鹿角市その地元尾去沢小学校6年・川上恵子さんの作文からの一節である。

「・・・私の夢みているマイナランド尾去沢は、自然豊かな景色の中に、建物があり、子どもや大人でにぎわい、時には動物達がうらやましそうに顔を出す。こんな観光地マイナランド尾去沢です。マイナランド尾去沢を守るためには、みんなが、自然を大切に、動植物を大切に、人間同士仲良くすることを大切にしていこうと思います。」

彼女の趣旨は、こうした「マイナランド尾去沢」を実現するには、市民が責任を持って、自分なりにでききる町づくり活動に取り組もうというもので、そのステージとしてこのマイナパークを挙げているのである。

このように、前身の尾去沢鉱山は、地域と切っても切れぬ関係で、1200年の歴史をこの土地に刻んだ最大の功労者である。資源の枯渇とコスト割れでそのまま廃坑にもならず、再度「マイナランド」として地位活性の役割を果たすことになったのは、地域にとっての価値が揺るがない証明でもあり、土地の遺伝子として次代に引き継がれている。

さて、“自然豊かな景色の中に、建物があり、子どもや大人でにぎわい、時には動物達がうらやましそうに顔を出す”環境は、どうやら現在の遺構のありようをそのまま保全することで実現しそうだ。ここにコンクリートのビルディングは似合わない。

「廃墟探検」ブームで一躍注目され、わが国のマイナパーク展示演出の雛形を作ったこの「マイナランド尾去沢」の現況を紹介する。

## 1.はじめに

「マイナランド尾去沢（おさりざわ）」は、ほとんどのマイナパークがそうであるように、秋田県鹿角市の山中にある。秋田といっても青森に近い場所柄、冬は雪に閉ざされる。この地を訪れたのは、本格的な冬将軍到来する前の晩秋であったが、既に2、3日前にかなりの降雪を見たという。そのため「必ずチェーンを携帯してくるように」（営業部課長代理・阿部督樹氏）とのアドバイスを受けた。かつて、「ゴールドパーク鳴海」の舗装されていない山道を苦勞して運転した経験から、「ヤマをなめちやイカン」と再度カツを入れ直し、カーショップにてチェーンを入手するなど、万全の体制を整えて出発した（しかし、取材当日はポカポカ陽気で、チェーンを使うことはなかったのである）。

## (1) 尾去沢鉱山の歴史

## 約1,200年の歴史を持つ“老舗”鉱山

マイナランドの前身となった尾去沢鉱山の歴史は、約1,200年という永い系譜があり、わが国の鉱山では老舗である。また、マイナパークとしての集客事業を本格的にスタートさせてからの時間も長く、いわば鉱山史の雛形のようなっている。



ではまず、マインランド尾去沢公式サイトの解説等をもとに、(1)伝説時代、(2)金山時代、(3)銅山時代、(4)近代鉱山時代、(5)戦後に分類して尾去沢鉱山の歴史を整理してみよう。

## 1) 伝説時代

尾去沢鉱山の発見は奈良時代の和銅元年（708）と伝承されている。産金は奈良東大寺の大仏鑄造に使われた、あるいは平安末期の藤原氏によって築かれた平泉の黄金文化に大いに貢献したなどのエピソードがある。その全てが荒唐無稽な作り話に決めつけることもできないともいわれている。

## 2) 金山の時代

慶長3年（1598）、後に初代の金山奉行となる北十左衛門によって白根、五十枚、西道、槇山など尾去沢の諸金山が開発された。「田舎なれども 南部の国は西も東も金の山」と民謡にうたわれたように、ゴールドラッシュを迎える。藩政時代を通じて南部藩の領内では124の金山が開発されたと伝えられているが、なかでも盛んであったのが鹿角の白根・西道の両山であり、尾去沢を中心として計18の金山が開かれていた。『東北鉱山風土記』等によれば、慶長年間には金掘工だけで3,800人が働き、山間の僻地にたちまち数千軒の鉱山町が出現するほど盛んであったという。このゴールドラッシュは約70年続くが、寛文年間に入ると下火になり、やがて金山にかわって銅山の開発が進められていく。



## 3) 長崎御用銅の時代

江戸時代、延宝2年（1674）以降は、山師（鉱山開発の専門家）・阿部小平治（あべこへいじ）の働きによって開発が軌道に乗り、尾去沢は有力な銅山に成長する。

正徳5年（1715）、幕府は南部藩に対して「長崎御用銅」という中国、オランダとの貿易決済に使われた銅65万斤（390トン）の供出を命じる。この量は尾去沢鉱山にとっては厳しい割り当てであった上に、買い上げ価格も安値であったため、鉱山経営は著しく藩財政を圧迫し、当然労働環境も過酷な条件を強いられる有り様だった。

それでも、一進一退を繰り返しながらも産出量は徐々に向上し、幕末には伊予の別子（愛媛県）・秋田の阿仁と並んで全国の産銅を三分するに達していた。

## 4) 近代鉱山時代

明治5年（1872）、大蔵省は南部藩の借財処理からんで、鉱山の稼行権（鉱業権）を盛岡の商人・鍵屋茂兵衛から没収し、岡田平蔵に払い下げ、さらに数人の経営者を経て明治22年（1889）には、三菱財閥の岩崎家にわたる。これ以降、閉山までの約90年は三菱の経営による近代化の歴史である。

わが国初のアメリカ式の発破試験、削岩機やダイナマイトの使用、洋式製錬の開始、水力発電所の建設など、次々と欧米の近代技術が投入されていった。

大正5年（1916）、「浮遊選鉱法」による最新式の選鉱場が完成し、近代鉱山としての態勢が整う。その後、日清・日露戦争から第一次、第二次世界大戦へと軍事色が強まり、軍需物資としての銅の需要も急増し、これに応える形で生産も飛躍的に増大していった。

昭和18年（1943）、軍需省の要請により超非常増産として、月間10万トンの鉱石を処理できる東洋一の選鉱場が増築されて、出鉱量は103万トンと史上最高を記録した。

## 5) 戦後の鉱山時代

終戦直後の停滞も、産業復興とともに資源少国における貴重な同資源として再び活気を取り戻し、生産量も復活する。しかし早くも昭和30年代に入ると、海外の開発途上国の鉱山開発が進み、世界的な過剰生産から銅の価格が低下してくる。やがて多くの鉱山と同じように、戦時中の乱掘などによる有力な鉱脈が減少し、鉱山としての老境を迎え、段階的に生産は縮小に向かう。昭和41年（1966）、すでに旧式となった製錬所が廃止され、昭和47年（1972）には親会社の三菱金属工業（株）から分離して尾去沢鉱山（株）となり、従業員も縮小された。そして昭和53年（1978）5月、長期にわたる銅価格の低迷と資源の枯渇でついに閉山に至る。

なお、三菱の経営となった明治22年から閉山までの生産実績は、おおよそ鉱石出鉱量2,850万トン・銅30万トン・金4.4トン・銀155トン、鉛と亜鉛が各1万トンと推定されている。主な年次の従業員数と生産の実績は表1の通り。

#### ○敷地内に「鹿角市鉱山歴史館」を設立

尾去沢鉱山の歴史は、マインランド尾去沢の一角に国土庁（当時）の伝統的文化都市環境整備保存事業に指定を受けて、昭和57年に鹿角市が建設した「鹿角市鉱山歴史館」に詳しい。鉱山史の資料展示場として無料で公開されている。

ここで採掘された大型鉱石標本40点に加えて、国内各地の鉱山から寄せられた鉱石標本20点、各国大使館を通じて収集された世界の鉱石標本約180点が揃っている。また、藩政時代から近代鉱山にいたるまでの工具を保存。採鉱、選鉱、製錬などに使われた用具類は、古文書類などとともに秋田県民俗文化財に指定された貴重な資料となっている。

そして、尾去沢鉱山の模型展示は、鉱山の全景、選鉱場、明治初期の製錬を再現。全長700kmに及んだの坑道を1200分の1に再現した立体模型は、1,200年の歴史を実感できる展示となっている。

現地を訪れた際は、観光坑道体験、廃墟のウォッチングとともにぜひ立ち寄って、歴史の重みというスパイスを驚きの印象に加えてもらいたい。

表1 従業員数と生産量の推移

年次	従業員数（人）	出鉱量（トン）	粗銅（トン）
明治27（1894）	1,205	29,300	740
大正元（1912）	1,637	119,372	2,188
大正7（1918）	2,491	206,913	2,352
昭和元（1926）	1,866	211,151	2,910
10年（1935）	2,138	534,866	5,663
18年（1943）	4,017	1,033,179	7,808
21年（1946）	2,977	193,560	1,217
25年（1950）	2,930	336,369	3,902
38年（1963）	2,311	797,785	7,856
47年（1972）	371	410,247	4,296
52年（1977）	309	231,564	2,710

（注）年次別の最高記録

- ※従業員数 昭和19年 4,492人
- ※出鉱量 昭和18年 1,033,179トン
- ※粗銅生産量 昭和38年 7,856トン

## ❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

### マイナランド 尾去沢（2）

#### 2. マインパークとしての再生

##### ○鉱山跡を鹿角地域の観光振興の核として再生

閉山の翌年（昭和54年6月）、秋田県・鹿角市・尾去沢鉱山（株）・秋北バス（株）などを中心とする「鹿角市尾去沢観光開発調査委員会」が発足し、約1年間の討議を経て、地域の活性化を図るため、鉱山跡を観光施設として活用する方策が報告書としてまとめられた。

観光開発としては、まず鉱山跡地は産業遺跡として二度と再現できない貴重な歴史的・社会的な財産であること。そしてこの事業は、鹿角地域における観光振興の核としての重責を担うものであること。この2点が開発の基本認識として確認され、次のような目標が設定されている。

- ・ 鉱山の特色と素材を最大限に活かし、斬新な観光施設として再生する。
- ・ 歴史性に重点をおくとともに、見る・触る・遊ぶ・学ぶの要素を備えた施設づくりを目指す。また、新しいタイプの総合的観光鉱山遊園地を志向する。
- ・ 観光坑道は単なる坑道と人形の陳列に終わらずに、一級の坑内博物館とする。

また、起業の設立および運営の理念としては、上記のほかに次の点が掲げられている。

- ・ 官民一体で設立する第三セクターの特色を十分に発揮し、企業存続基盤を早期に確立する。
- ・ 施設づくりにあたっては、お客の安全を第一に考慮し、円滑な観覧動線の確保とストーリーのある展示ゾーンづくりを行う。
- ・ 施設ブランドは、誰もが気軽に楽しみ、親しめるイメージを込めて、マイナランド（MINE＝鉱山、LAND＝遊園地）尾去沢とする。

以上のような理念から、佐渡金山跡地を集客施設化した『史跡・佐渡金山』等の先行オープンした事例を参考にしながら、4年間の準備期間を経た後、昭和57年（1982）4月25日に地域の人々の熱い期待の元にオープンしたのである。

##### ○平成元年をピークに現在は13万人で頭打ち

初年度は、目標来場者数10万人に対し、オープン効果もあったにせよ27万人の来場者が訪れるという大盛況だった。その後も年間約3万人ずつ増加する。さらに箱物集客施設の構造的課題である、オープン効果消滅後の来場客数減対策として、平成元年には観光坑道と並ぶ目玉として「シューティングアドベンチャー」をオープン、ピーク（約52万人）に達したが、以降、来場客数は減少に転じている。それでもここ数年は約13万人で横ばいだという。



## ○鉱山資源に立脚したはじめてのマインパーク

鉱山の遺構を本格的な集客施設として再利用しようとする試みは、佐渡島の金山跡が最も早かったと言う。しかし佐渡金山の場合、そもそも島そのものが観光資源であり、「佐渡の金山送り」ではないが、時代劇などを通じて知名度が高い。つまり、金山だけが飯の種ではないのだ。

対して、周囲を山に囲まれた尾去沢は、鉱山に絞ってその歴史と文化を忠実に再現する実直なプレゼンテーションである。開発目標の「観光坑道は単なる坑道と人形の陳列に終わらずに、一級の坑内博物館とする」、これは“坑内の総延長約300mで、約70体のコンピューター制御の電動人形を配置し当時の様子を再現する”佐渡金山へのはっきりしたアンチテーゼである。

現在の日本では希となった純粋なエネルギー資源産業の遺構としての山を集客化したと言う意味では、マインランド尾去沢がパイオニアとして位置づけてもいいだろう。

「空間通信」のサイトを参照頂きたい。マインランド尾去沢オープン後に建設された各地のマインパークは、多かれ少なかれこの影響をはっきりと見てとれるのである。



敷地内にある「鹿角市鉱山歴史館」

## ❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

### マイナランド 尾去沢（3）

#### 3.現況

##### 観光坑道+アミューズメントで構成

現在の施設構成は次の通りである。

##### 1) 鉱山歴史の坑道

尾去沢鉱山の800kmにおよぶ坑道のうち、1.7kmを整備して造った観覧施設で、

- ・岩盤が堅く、しかも保存状態が極めて良い
- ・自然通気の働きによって換気が良く保たれている
- ・坑内排水が完全

などの尾去沢鉱山の特徴を十分に活かすように設とされた。

観覧に利用する坑道は、「石切沢通洞坑」と呼ばれる作業用の主坑道を中心に、銅鉱脈の採掘跡、坑内事務所周辺など実際に使用されていた坑道、坑内施設である。ここを中心に、金山当時の旧坑道を横断する方向で新しく開削された坑道などで構成されたコースである。

所要時間は、標準コースで約45分（約1.7km）、早周りコース約30分（約1.1km）となっている。

##### 2)シューティングアドベンチャー

観光坑道の手前、駐車場の隣地にある。中身は宇宙船「プルトン号」に乗って移動しながら、全車両に装着された総数216丁ものレーザーガンを使って、次々と現われる48個のエイリアン（イガイガー率いるデメーリン、そしてホニョホニョ）を標的として射撃して回るシューティングゲーム。走行距離800m、乗車時間20分、平成元年オープン。

##### 3) レストハウス

ログハウス調の建物で「ラムジンギスカン」と「ポークしゃぶしゃぶ（予約のみ）」がメインメニュー。収容人員320名。

##### 4) おやすみ処

テラスには、「ファーストフードショップ」（ポテトとソフトクリームの店）、「そば処金山庵」（名物からめそばと秋田名産稲庭うどんの店）、「ラーメン専門店」（比内地鶏スープのキリタンポラーメン、自然の山菜そば みそつけタンポの店）、「鹿角特選味の店」（鹿角りんごをはじめ、果物と農産物販売と食事の店）の4つの飲食店がある。

##### 5) おみやげ館

天然鉱石、純金製品、金粉商品、地元（秋田県、鹿角市）の名産品を販売

##### 6) 各種アトラクション

ゴーカート、バッテリーカーなどアミューズメント遊具、ゲームセンターを設置

○坑道観光もある身近なレジャー施設として訴求

以上のように、「鉱山跡地は産業遺跡として二度と再現できない貴重な歴史的・社会的な財産であり、鹿角地域における観光振興の核としての重責を担うためにも、鉱山の特色と素材を最大限に活かした斬新な観光施設として、歴史性に重点をおくとともに、見る・触る・遊ぶ・学ぶ要素を備えた新しいタイプの総合的観光鉱山遊園地を志向」したものの、遊園地の性格が強くなっているのが現実である。つまり、坑道体験型文化施設よりも、“坑道観光もある身近なレジャー施設”なのである。

これは、「第三セクターという経営だが、いつまでも出資者の行政や親会社の三菱マテリアルに甘えられない。単独事業としての成立を目指す事」（同・阿部氏）とする運営意識の反映でもある。

さらに、雪国で事実上冬季の稼働は期待できないため、残る3シーズンが誘客の勝負となる自然環境、そして坑道そのものの意味や歴史性は奥が深いが、リピートにつながるかという論議においては必ずしも肯定されないという運営者のポテンシャル認識が投影されている。

このため、“マインランド”の意義や語感イメージを大事にしながらも、実際に訪れてみると、その看板をくぐるとまずは誰もがわかりやすい遊園地が現れて足を止めさせるゾーニングとなっている。

しかし、実際に現地を訪れてみると、これはブームとの絡みもあるのだが、遊園地よりも現存するま



施設構成。駐車場は広大である。

#### 4. 訪問してのインプレッション

##### (1) アプローチ

遊園地よりも遺構をファーストコンタクトに

秋田県鹿角市は、東北二大観光地である十和田と八幡平ほぼ中央にあたる交通拠点である。取材陣は、国道282号



を十和田から南下する格好で、主要な交差点名とそこに示されているだろうサイン看板を頼りにクルマを走らせた。



幸い、途中までの角館市や鹿角市は国道と並行するJR花輪線に沿って町並みが形成されているため、ほとんど迷うことなく、また予想通り主要地点でのサイン看板のおかげで、これが最終アプローチと思われる山道に進む。

ところが、途中、上下どちらでも尾去沢マインパークには行けますよ、という分岐が現れる。我々は、見た目道路幅が広い新道(?)を選んで上りの方へ進むと、間もなく同所の広い駐車場、旧尾去沢鉱山の付帯建物(選鉱場、製錬所など)が一望できるエントランスに到着する。

#### ○廃墟となった遺構郡が独自の景観を支配

この外観はとても印象的である。既に廃墟と化した建築、秋の東北の西陽を遮る巨大な煙突。ヤマに沿って掘られた、塹壕のごときコンクリート。そして、何かの記憶を封印するかのように整地された広場。ここまで、旧鉱山の施設が残っているのを見たのは初めてである。取り壊すにはすでにコストがかりすぎるのであろう、静かにヤマへ同化するのを人は見守るのみである。

しかしながら、マインパークを見慣れた我々にとっても、この情景は強烈な印象となった。それは、こうした景観は滅多に見られるものではないから、というよりも、厳しいばかりの無情感を持ってしまふのだ。わずか25年前は、これらは、活力の象徴であったに違いない。しかし、破壊の活力もまた創造の表現である以上、ただ拘置されているだけの水泡は破壊も再生も封じられている。そこに残るのは絶望であり、無情である。この印象が施設全体景観を支配しているのが、このようにレジャーコンセプトを発揮したい場合にはつらい点であろうと思う。

人の第一印象はかなり強烈である。これを大事にすることがリピートに大きく影響するのは言うまでもない。

なお、アプローチにおける先程の交差点だが、クルマを走らせてみると、我々が進んだ道の方がアクセスとしては「表」であった。それなりに道幅があり、カーブも抑えられ、運転しやすい。一方、交差点で下を選んだ場合だが、実はこれが本来のアプローチであったことがわかる。舗装状態はあまりよくないし、カーブも多く、巨木の緑が覆い被さるような場所もある。それでも、道が開けて最初に眼に入ってくるのは鉱山の遺構であり、“マインパークに来たんだ”というインパクトがある。実は現在でも工場の一部でポーリング業者が営業しているようで、そこへの営業車両のアクセスとして使用したらしい、一般は先程の上からの道を通るように(公式にはそうは書いていないが)配慮したのであろう。しかし、アクセスからすでにマインパーク体験を演出すべきという観点から、この“旧道”の利用をお勧めしたい。従って、国道から例の分岐点にかけて、「大型バス、大型セダンは↑」「狭いが昔からのアクセスは↓」のような情報提供サイン看板を多数設置して、ルート案内を兼ねたマインド訴求を展開してはどうだろう。



## ❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

### メインランド 尾去沢（4）

#### 4.訪問してのインプレッション

##### （2）施設のインプレッション

##### 冬期は休業多く坑道のみ

それでは各設備、アトラクションについての印象をまとめておこう。なお、取材日はオフシーズンの平日ということで、アトラクション系設備は運休中であつた。施設全体は年中無休であるが、冬期は、土・日・祝日のみ営業で、以降積雪に備えて、機械の整備・調整を済ませてから“冬ごもり”させるのだという。

##### 1) 飲食店

これもオフピークということで、営業していたのは「ラーメン専門店」のみであつた（レストハウスは定休日）。“比内地鶏スープ”と一応特徴を出しているのので、「辛口ラーメン700円」を食べたが、単なる“からしみそラーメン”で、量も味も普通。他のメニューを見ても普通の「しょうゆラーメン」でも600円と価格設定が高め。

ここに限らず、どうして観光地等の食事は、何の特徴もない普通のメニューでも価格が高めなのか。食でも集客を狙うのであれば、その土地の名産、地物素材を使って特徴を出し、価格は物流費が低く、生産地直接買い付け等の努力で安くするべきではないだろうか。

さらに、ほとんど来客が期待できないから、という気持ちはわかるが、もう少しメニューの選択肢があってもいいのではないか。もちろんここは、JR鹿角花輪駅までクルマで約10分なので、食事は駅前商店街へ・・・という考えもあるが、わざわざ遠くから来た観光客にも配慮すべきである。

##### 2) 観光坑道-1

前述のようにこの中の造り込みは、その後各地のメインパークづくりの手本ともなった。

まず、窓口で入場券を購入し、貸し出されるマグシーバーを首からさげ、イヤホン装着して坑道へ向かう。坑道入口は近代鉱山としての栄華を印象づけるような、立派なレンガ造りのトンネルである。

早速入坑すると、足下の通路にはトロッコ電車の線路跡が遺されているが、入坑者がつまづかないよう、安全対策のためゲージの高さまでコンクリートで埋められている。これは非常にもったいない。「ここはトロッコ電車が入坑したい！」と特に編集長（鉄道好き）が声を出して残念がっていた。もちろんコストや法規制等があるだろうが、冬期にほぼ休業する各種アトラクションのコストを削ってもやるべきだったのではないかと彼は主張する。



ほとんど店休だったお休み処



「ラーメン専門店」のメニュー



まずマグシーバーを装着



立派な坑道入口。通路にゲージの跡が見える

## ○30mの断崖等、坑道の跡をそのままに演出

最初のゾーンは「太古の世界・幻想の道」。「マインキャニオン」と命名したシュリンクエージ採掘法によってできた断崖を中心に、坑道の跡をそのまま見せている。パンフレットやホームページでは、“最大の見どころ”と解説している通り、高さ約30mの断崖は赤や緑のライトで演出され、幻想的でもある。通路は谷を渡る橋のように断崖に沿って作られ、上下の断崖がよく見える。

途中、ライトアップだけのトンネルを抜けると、休憩所を兼ねた神社、古酒の蔵、おみくじ所に到着。休憩所ということから、写真撮影用に掘削機とヘルメットを設置し、自由に装着して撮影が可能。早速ヘルメットをかぶって坑夫を気取ってみた。

「古酒の蔵」は、日本酒やワインを長期貯蔵し熟成させている場所である。ここでは、持ち込んだ酒を預かり、保管する仕組み（有料）を取っている。また、おみやげ館では、「地底の神秘」として大吟醸酒を販売している。

おみくじ所は少し趣向を凝らしている。初穂料(100円)を浄財箱へ投入し、箱に入っているおみくじ入りのカプセルを取る。そしておみくじを見終わったら、再びカプセルへ入れて、少し先(約5m)の祈願所の投入口へ入れるというシステム。こういった行動を取ることで、儀式的な意味合いが加えられ、何か御利益がありそうな感じをうまく突いた仕組みとなっている。

先へ進み、再びライトアップされたトンネルを抜けると「近代坑道・卯西ヒ(注1)の道」のゾーンへ。まずは「坑内事務所」と「休憩所」の再現。「休憩所」では約30体のマネキンの坑夫がお茶を飲んだり手弁当を広げたりしてくつろいでいる。しかし、全マネキンがスマートで八頭身の西洋系美男子。オールバックのカツラやメガネ、鉢巻きをつけ、肌の色を浅黒くしているのだが、恐らくデパートで作業服売り場をつくると(こんな売り場はない?)こういう風になりそうだ。これは「坑内事務所」も同じで、全員美男子で全く現実感がない。マネキンの顔さえ見なければ、什器や机上の小物など当時のモノを実際に使ったりして、非常にリアルなのだが…。

そこからさらに進むと、実際に採石を積んだバッテリー電車、トrolley電車の長大編成の実物が展示してあったり、掘削機とマネキンでシュリンクエージ採掘の再現があったり、非常に分かりやすく、また初めて見る大型機器に感動すら覚える。

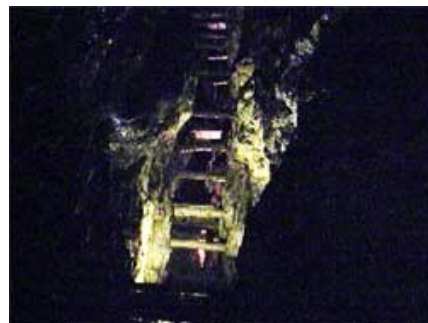
そしてこのゾーンの後には、大型機器のメンテナンス状況の再現。ここはセンサーで人が通ると、溶接機や研磨機が動き出し、マネキンが作業を始める。マネキンの動きは小さいが、実際に研磨や溶接の音、火花も出ているため、臨場感がある。このような再現は過去のマインパークには無い手法であった。

再び光の演出トンネルを抜けると今度はパネルによる、尾去沢鉱山の歴史や規模、構造、採掘法の解説である。ここに展示してある写真には、当時の坑夫が写っていたが、前に見たマネキンとは似ても似つかない純粋な東洋顔で、体型もがっちりして一見怖そうな男臭い外見であった。

次のゾーンは「ちょんまげ坑道・慶長の道」。「尾去西道金山奉行」から始まり、金の選別作業、鉱石運搬、ためき掘り採掘作業、水抜き排水作業等を動くマネキンで再現している。このゾーンのマネキンの顔は東洋系で、着物を着て男性はちょんまげ、女性は日本髪といういでたちで違和感なく見ることができた。

最後に、実際に“隠れ切支丹(キリシタン)”が刻んだ十字架の跡を展示してあり、こんな東北の山中に様々な人が一攫千金を夢見て(あるいは逃れてきて)作業をしていた史実を改めて実感することができた。

以上、約45分の坑道ルートは、3ゾーンから構成されている。順番は「太古の世界・幻想の道」、「近代坑道・卯西ヒの道」、「ちょんまげ坑道・慶長の道」となっている。近代の後に、なぜ江戸時代に戻るのか。これは、オープン当初は「太古の世界・幻想の道」と「ちょんまげ坑道・慶長の道」が先行オープン(現在の早周りコース)し



ライトアップで幻想的な「マイキャニオン」



地底貯蔵する「古酒の蔵」



長期貯蔵し熟成を図る「古酒の蔵」

て、後からこの「近代坑道・卯酉ヒの道」を整備したからだという。

簡単にいうと、実際に掘られた坑道の時代を背景として再現して、動線を結ぶと、こうなったということである。しかし、手掘り時代はこんなに苦労したが、近代では採掘法が効率化され、大型機器による量産が可能となったという時の流れは、わからなくなっている。開発時に設定した目標（学ぶ）や理念（ストーリーある展示）からみると、疑問が残る。



「カプセル」を使って遊び要素を入れたおみくじ

※注1：「ヒ」は“金”へんに“通”と書く。尾去沢鉱山の鉱脈のうち、採鉱の対象とされた約560条は、24の「ヒ」と呼ばれる鉱脈群に分けられている。それぞれの「ヒ」には固有名詞がつけられており、マインランド尾去沢の観光坑道はこのうちの「卯酉ヒ（東西鉱脈群の意）」に当たっている。

## ❶ 厳冬続く地方のレジャーパーク

### マインランド 尾去沢（5）

#### 4.訪問してのインプレッション

##### （2）施設のインプレッション 冬期は休業多く坑道のみ

##### 2) 観光坑道-2

##### ○遺構を駆使した演出なのに浮いているマネキン

坑道のプレゼンテーションの考え方は、以下の2点に代表される。

##### 1) 可能な限り当時をそのまま見せよう

その代表が坑道列車で、網の目のように敷設された線路がそのままの状態（一部歩きやすいようにとコンクリートで軌間を埋めているが）で置かれている。一部では、架線もそのままにされていた。また、坑道の分かれ目、すなわち“機関区”にあたる場所では、本物の電気機関車と掘削した鉱物を積載する貨車が、今にも動きそうな外観メンテナンスで、しかも長大編成の姿で置かれている。この規模と種類はマインパークナンバーワンと言ってよい。

##### 2) 情景展示により、直感的に訴求内容を理解せよう

例えば掘削用の工具を見ながら、その歴史や使用方法をアナウンスだけで聞いても、多く人はピンと来ないだろう。そこで、マネキンを使って「実際にどう使っていたのか」「どのように動いていたのか」という情景展示を導入している。さらに、音声についても、単なるナレーションだけでなく、当時の録音に従うなどして、最盛期の鉱山に置ける仕事ぶりを可能な限り再現しようと努力している

##### ○「八等身」マネキンはデパートで動こう

ただし、残念なことに近代ゾーンのマネキンは小顔の8等身で、しかもみんな若く西洋系の美形ぞろいと来ている。

一方、壁に展示された当時のドキュメント写真に写る人々はみな日本人。当然、仕事柄、作業着も肌も汚れ、無精ひげさえ生えている。

この乖離はちょっと許容できなかった。このような展示方法は、施設運営者が本当に“マイン”を伝えたいのか、その姿勢を疑われる結果になるものと再認識すべきである。

いますぐ、我々が良く知った日本人像、本当にここで再現したい情景で働いていた先達に作り直すべきだと思う。

##### （3）おみやげ館



“いい男”ぞろいの情景再現



石を積んだ長大編成のトロリー電車



実際に研磨や溶接の音、火花が飛び散る



「ちょんまげ坑道」のマネキンはきれいだが日本人

## 金山をアイデアとしたオリジナル茶と日本酒

思ったより坑道取材に時間がかかり、阿部課長代理へのインタビューが終わる頃、すでに売店は消灯していた。それでは土産品のレポートができぬと、ワガママを言って臨時に開店していただいた。

おそらく地域のあちこちで流通しているのだろう多数の商品のなかに、同所のオリジナルとして、『金山御茶コ』（金箔入りコンブ茶）を見つけ、購入した（→）。これはコンブに金箔をまぶしたモノで、茶碗に入れてお湯を注ぐと、金箔入りのコンブ茶になる。これが結構おいしくて、編集部ではすぐになくなってしまった。

そして、「金山奉行」。秋田の日本酒「千歳盛」に金箔を入れた酒である。金山だからパッケージの金色はわかりやすいとして、金箔入りというアイデアは買える。金箔入りの日本酒は、あるにはあるのだが、需要は正月かお祝いの席だけで、あまり流通していない。大人にとって、砂金体験でいくばくかの砂金を手にするよりこちらの方が現実的でしょう。

その他、地元鹿角の名産「南部せんべい」「大直利（くるみ餅）」、秋田の名産「稲庭うどん」「きりたんぼ」、親会社三菱マテリアルの鉱石類、お菓子類を販売していた。



隠れキリシタンによって刻まれた十字架



金箔入り日本酒「金山奉行」

## ▷ 厳冬続く地方のレジャーパーク

## マインランド 尾去沢（6）

## 5.再び、パイオニアとして

## ○産業遺構探検に対して「拝観料」が必要

取材の最後に、阿部氏から参考にと見せていただいた写真集、これは「日本の地下」というタイトルだったと思うが、ここに尾去沢の地下坑道がプロのカメラマンによって解釈された結果のモノクロ写真が納められていた。そして、他にも多数の炭鉱が収録されていた。

この2001年冬、北海道釧路の太平洋炭坑が閉山して、日本から炭鉱山は消えてしまった。そして、炭鉱というビジネスの終焉とともに、そこに息づいていた町の繁栄も過去のものになりつつある。過去を現代に引き戻すために、マインパークは大きな期待を背負って登場したコンセプトであったが、そのもくろみは正直成功していない。

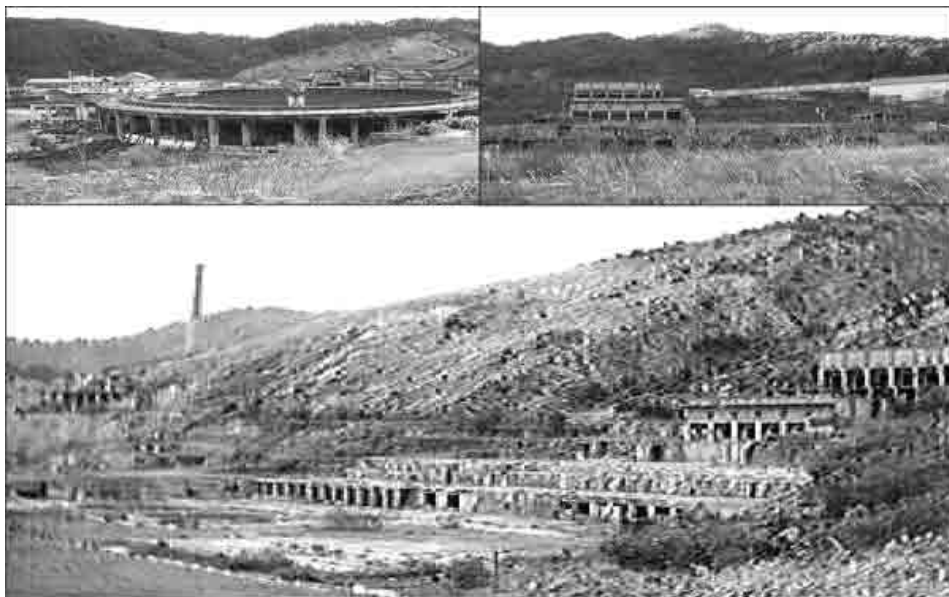
ここ尾去沢にしても、集客施設という事業をいち早く導入し、未来創造に打って出た取り組みは、各地の鉱山事業所の跡地利用に関する教科書ともなったが、現段階では跡地活性化というよりも事業活性化に注力しているという印象である。

なぜだろう？それは、モノクロ写真が示すように、実は現存する遺構はヤマに帰る、自然に戻るといって再生産を継続しており、そのエネルギーは、景観から彩度を抜いてしまうような力がある。私たちが最初に受けた施設の全体景観の無情的な印象は、実は強力な大地のパワーによって、私たちが度肝を抜かれた結果であるようにも思う。

同施設はもちろん、多くのマインパークは観光坑道体験をメイン訴求とする。これにアトラクションと飲食を加えてオカネを落としてもらおうという収益構造となっている。

尾去沢に来て思うのは、ひょっとすると、これからは「拝観料」（他に適当な言葉が見つからないのだが）獲得のスキームを作るべきかもしれない。もちろんどこでもというわけではないが、大地の恵みを人工化した結果が再びその地に帰依する状態の景観エネルギーは、非常に感覚で個人的だが、インパクトは圧倒的である。快感を超えた感動体験、そんなイメージがわいてくる。

願わくば、マインランド尾去沢だけの、このままの景観をずっと続けてもらいたい。廃墟となった人工物も含めた自然環境なのだから。



敷地内の遺跡群。整備にはコストが“かかりすぎて”廃墟のまま